（金目川水系 流域フォーラム2007特集号）

金目川水系

せせらぎ通信

Vol.16

編集・発行　金目川水系流域ネットワーク世話人会　　発行日　2007 年 4 月 1 日

室川水源域探索ハイキングのご案内

日　　時　*平成19年5月12日（土）午前10時～午後3時*
（当日雨天の場合は、5月19日（土）に順延）

集合場所　*渋沢駅改札口前*（小田急小田原線）
午前10時集合（時間厳守）

コ ー ス　渋沢駅→出羽三山供養塔（この道は、矢倉沢往還（大山みち）の一部）→室川水源域→若竹の泉→谷鼎生家跡→白山神社下湧水→泉蔵寺 →白山神社→かりがねの松（雁音神社、この道は古い時代の街道）→西端の里山→頭高山→赤松沢湧水→喜叟寺→大山みち道標→大イチョウ→渋沢駅
（全行程 5.8km、所要時間 徒歩 約3時間）

（若竹の泉）

連 絡 先　秋山健夫　Tel 0463（88）0094　E-mail アドレス cjb53871@pop02.odn.ne.jp

開催報告 ―― 金目川水系 流域フォーラム2007

神奈川の中央部、湘南地域を北から流れる金目川を中心として、山から海までの循環型社会の実現を考える我々にとって、このテーマは大きな関心事となっています。

そこで、今回の流域フォーラム2007では、まず個別のテーマを3つに分け、それぞれの分科会に分かれて現状の課題や具体的な対策に向けての提案などの話し合いを行い、その結果を踏まえて全体会議の中で、参加者全員が「流域で協力してできること」について討論を行った。

開催日時 2007 年 2 月 4 日（日） 午後 1 時~ 4 時
会　　場　東海大学湘南校舎（13 号館）
主　　催　NPO 東海大学地域環境ネットワーク
金目川水系流域ネットワーク

（フォーラム全体会の風景）

テ ー マ　*水源の山林はどうなっているか。*
それは私たちの生活にどう関わっているか。

全体会議　テーマ 「流域で互いに理解・協力できることは？

○全体会議では、次頁以降で掲げた各分科会テーマごとにそれぞれ議論や提案などが行われ、その結果について、各分科会リーダーから報告（詳細な内容は 2 ～ 4 頁に記載）と、発表者への質問や具体的な課題提起、参加者自らの体験を踏まえた意見や提案などの討論が行われた。（参加者 約 120 名）
　分科会１　現在の丹沢やその山麓における課題と具体的な対策、グリーンハイクの提案など
　分科会２　流域農業の実態、農業を進めていく上での課題と環境中心の農業の取り組みなど
　分科会３　環境教育の必要性や実践事例、五感で感じる体験の重要性など
○今回の全体会議のまとめとして、各分科会で討議した内容に係わる「流域での相互理解と協力」について、現在の深刻な環境問題などに対処し、流域で暮らす我々が少しでも豊かに暮らすことのできる「持続可能な社会」を実現するため、あらためて「流域における循環型の暮らしの実現」に向けて、「我々のあらゆる活動の中心に『環境』を置いて考える」ことが重要であり、これについてお互いに理解し、今後協働、協力した活動を展開することとした。　（文責　野間紀之）

分科会の活動報告

分科会1（分科会参加者　25 ～ 30 名）

テーマ「神奈川の山はどうなっているか、それは川や海にどう影響をもたらしているか？」

丹沢山地の現状

（丹沢ブナ党の梶谷さんに、スライドを使って丹沢の様子をお話いただいた。）

（分科会①の検討風景）

ブナの立ち枯れは 1980 年代から見られた。

南側に面した高い所で、樹齢 200 年くらいのブナがどんどん枯れている。また、林床のスズタケも枯れていて、シカの食害が言われているが、はっきりしない。シカは尾根の部分と里に近い所に住んでいて、中腹は人工林で防鹿柵がめぐらされているのでシカは住めない。

シカは餌不足のため、マユミやモミなどの立木周囲の皮をぐるりと食って枯らせている。防鹿柵をはずして人工林部にシカを入れてやった方が良いと思って提案している。人工林のスギ、ヒノキには樹皮食いは見られない。シカの食害は、かつて背丈ほどの藪だった林床を、毒草以外は下草のない状態にしてしまったので、土壌の流失がひどい。その予防に植生保護柵が設置されている。

もう一つわれわれが問題にしているのは林道・堰堤などで、急な斜面で林道の法面が切られていて、大型動物の行動を妨げているし、林を分断して植生を変え、粗大ゴミがいたる所に捨てられている。また、大きな堰堤や、林道工事の残土投棄は沢の水生生物に壊滅的な打撃を与えているし、下流域を見ると、適度な砂礫の供給のない河口では海岸の後退が起こっている。

その他、観光目的のオーバーユースの問題や、人工林の手入れ不足、崩壊地などの問題がある。また、麓では大山へのロープウェイなど新たな開発計画が自然を脅かしている。

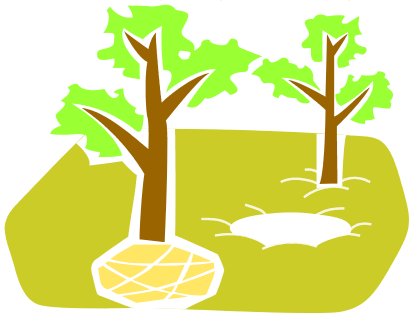
丹沢山麓では（蓑毛・秦野の方々のお話と梶谷さんの情報）

10 年前ごろに比べてシカやイノシシが盛んに出てきて、ヤマビルが目立って多くなった。ヒルの出現は東から進んでいて、まだ大倉にはあまりいないようだが、蓑毛、羽根では 4，5 月になるとすごい。シカの爪に 5 匹も付着しているといい、一回血を吸うと 1 週間くらいで産卵するそうで、シカと離れても生存可能らしい。農地や家の庭にもヒルが出て、屋外の作業が恐れられている。食酢を身体に噴霧して食われるのを予防するとか、ヒルは湿気と高温を好むので、下草を燃やして林床をきれいにすることが試みられているが、燃やすことも最近では届けが要るようで、全部を燃やすことは人手の点でも技術的にも容易ではない。

里山の手入れ（渋沢、西端里山林での実践報告）

秦野市南西の大井町に近い所の農業振興地域であるが、頂上に約 8 万ｍ^{2}くらいの里山林（組合地）がある。30 年ほど前に、近くの矢倉沢往還が拡幅・舗装されてから軽トラックが入るようになり、ゴミの不法投棄が絶えない。まず、この里山の手入れにはゴミの撤去が必要で、20 年前に何日もかけて道路まで出してリレー方式で片付けた。林内にはフジの蔓がはびこり、アオキが密生して荒れていたので、これを平成 14 年からボランティア（まほろば里山林を育む会）の方々の協力を得て切り開き、約 3 年間掛かって「幽霊林が美林に蘇った」と新聞に書かれるようにした。平成 15 年 7 月には渋沢小学校の学習林に指定され、年に何回か、百数十名の児童が里山の学習に来ていて、今、どんぐりを育てて山に植えることを試みようとしている。

ボランティアの献身的な活動がなければ西端里山林は今もゴミがさらに増えていたかしれない。16 年 6 月には環境庁の「里地里山保全再生モデル事業地」に指定され、全国 4 箇所のうちに入った。その関係で環境庁とか大学など、いろいろな方が見えるようになった。現在、ボランティア 15 名、組合員 5 名ほどで続けているが、年々歳をとって行くし、後継者が見つからない問題がある。



個人所有林の現状（松田町からの声）

我家にも山林があるが、ほったらかし状態でどうしたらよいかわからない。お年寄りのおうちも多いし、手入れをしようとして道を作れば粗大ゴミを捨てられる。

土屋橋付近でカワウの大群が川魚を食い荒らしている（北矢名の方の発言）

毎日 20 から 30 羽来ていて、昨年もいたけれど今年は特に多い。酒匂川ではカワウが数百羽の単位で魚をさらっているので、ここ 2，3 年は太公望も集まらない状況だ。このまましておくと金目川も早晩、酒匂川と同じになってしまうだろう。何とかしないといけない。

その他の声

以上、分科会のテーマに沿った主要な発言を紹介しましたが、このほかに、「丹沢では今も方々で問題のある林道工事が進んでいる」という情報、「山の自然を考える場合、人工林の経済的価値を守りながら生態的機能をいかに保つかが問題で、丹沢の人工林の問題には深いものがある」との意見、また、第二東名高速道計画について、「こんな自然破壊の計画が容認されながら、秦野の里山保全と言っても釈然としない。当ネットとしても意見を上げるべきではないのか」「伊勢原ではすでに第二東名の準備が進み、金目川水系上流部が相当に改変されている」などの意見や現状報告がありました。里山保全に関連して、「里山が生活の中で必要だった頃には、地域の子ども達を見る目がやさしかった。地域で子どもを育てることと、安全で安心な食べ物も育てることを求めていきたい」という声、山によく行っておられる方からは、クリーンハイクの紹介と、特に若い学生の方々へのお誘いがありました。（文責　佐々木園子）

○分科会２（分科会参加者　約30名参加）

テーマ　「流域における地産地消への取り組みと課題」

分科会 2 は、フィールド情報を大切にする意味合いから、秦野市農協の山口常務さんをお迎えして話を聞いた。山口さんは秦野市農協の「地場サンズ」を計画から運営まで担当されてきた方です。循環型社会の構築を目指す我々はその解決策を「地場サンズ」の成功例から学ぶことにした。

（分科会②の検討風景）

「地場サンズ」が成功している理由は何ですか。一言で言えば消費者と生産者のニーズが一致したということでしょう。消費者のニーズとは安価で新鮮、生産者のニーズとは従来より利益があるということです。特に生産者は自分の商品の売り上げを毎日把握出来るため、消費者が何を望んでいるか直接知ることが出来るわけです。この情報から生産者はより品質の優れた野菜を作る努力をするわけです。この循環が良い結果を生む要因になっているようです。

売り場には地産地消や身土不二など環境にやさしい標語が掲載されていますが、農協は食の安全と環境問題にどのように取り組んでいるのですか。

実際は「消費者が安価と新鮮、生産が利益を優先」して販売されているのが実情です。本来、地場サンズが率先して供給しなくてはならない無農薬・減農薬野菜の供給は、消費者のニーズがそこまでいっていないという問題もあり、あまり進んでいません。

農協は食の安全や環境問題など地域住民の環境意識の向上を、地場サンズが主体となって進めて欲しいと、多くの意見や提案がなされた。

今回の分科会討論を通じて、農業の実態や消費者の考え方の情報が得られとても有意義であった。しかし、消費者と生産者の関係がいまだ経済理論でしか結びついていない現状に、今後の食生活の危うさを感じた。また、循環型社会を目指す我々は食の安全安心の確保が急務であることを確認した。（文責　秋山健夫）

分科会３　（分科会参加者　24名）

テーマ　「流域における体験型環境教育－夏休み金目川生き物観察会活動報告

東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程の藤吉正明先生による司会進行のもと、分科会③（流域における体験型環境教育）が開かれた。なお当分科会への参加人数は、途中入室者も含め 24 名であった。

まず、同学科主任であり NPO 法人東海大学地域環境ネットワーク理事の藤野裕弘先生から、

当 NPO の主な活動内容の 1 つとして環境教育を掲げていること、今後は NPO に所属する学生が中心となり、環境教育を展開していく予定であることなどの紹介があった。
　その後、昨年の夏に開催された「夏休み金目川生き物観察会」の活動内容を私（同課程・北野忠）が報告した。以下にその報告内容を簡単に紹介する。

『2006 年 7 月 31 日に開かれた「夏休み金目川生き物観察会」は、NPO 法人東海大学地域環境ネッワークと金目川水系流域ネットワークの共催によるものである。参加者は金目小学校とみずほ小学校の児童と保護者であり、参加した児童数は午前の部 37 人、午後の部 25 人であった。
　観察会の流れは、
　　①集合･受付での参加の確認･グループ分け
　　②注意事項や観察会の内容の説明
　　③生き物の採集、
　　④採集した生物の説明
　　⑤ミニ水族館、タッチングコーナーでの生き物の観察
　　⑥アンケート記入・資料配布
　　⑦解散
である。

（藤吉先生の進行で進められた分科会③に風景）

　当日、川に入ってからは、最初こそ学生や地元の方に教わりながら慣れない手つきで生き物を探していたが、どんなところに生き物がいてどのようにすれば採れるのかが分かるようになると、子供たちは夢中になって生き物を捕まえていた。最後にとったアンケートでも、「今日は楽しかったですか」「今日は勉強になりましたか」「生き物は好きですか」等の問いに対し、参加児童の返答は良好であった。

　当観察会は、柳川三郎さんをはじめとする地元の方、教養学部人間環境学科自然環境課程の学生有志によるたいへん熱心な協力がなければ実行し得なかった。今後このような会を継続していくためには、小学校、家庭、地域の方、学生の理解や協力は必須であるといえる。また、さらなる安全管理の徹底と、活動資金の捻出が重要な課題である。』

活動内容を報告した後には、分科会参加者からの意見・感想や要望を伺った。その主な意見や感想として、「事前の打ち合わせの際、参加される地元の方への呼びかけがほしかった」「活動資金は、主催者側の負担でよいのではないか（これに対して、そうすると継続性に問題が出てくる、との意見も出た)」などが挙げられた。

　要望としては、「水の生き物の観察だけではなく、陸（水辺）の生き物の紹介もしていただきたい」「農業と自然環境との関係を紹介する環境教育はできないか」「金目地区だけでなく、他の地域での活動もお願いしたい」などが挙げられた。これらは観察会の主催者である我々にとって非常に貴重な資料であり、今後、体験型環境教育をどう展開していくべきかを検討していく上で参考にさせていただきたいと考えている。
（報告者　東海大学 北野忠）

金目ネットの部屋の引っ越しのご案内

これまでの東海大学の 8 号館の部屋から、
J館406号（南門外の円形建物の南側、武道館の横）
へ引っ越しました。
是非、ご活用下さい。（現在のところ、電話未設置）

○ご意見、ご感想、地域情報、入会希望などがございましたら下記までお寄せ下さい。

事務局 〒 259-1292 平塚市北金目 1117
東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程　　佐々木園子
事務局あてのご連絡は　**Fax 0463(50)2208**　（自然環境課程）にお願いします。
（上記の部屋で、毎月第２土曜日の午後1時より、例会を開催しています。是非ご参加下さい。）